助成事業

助成事業は、子ども支援に取り組む団体への助成を通じて子どもたちを支援する事業です。志を同じくする方々と共に、3つのテーマに取り組んでいます。

経済的困難を抱える子どもの学び支援

重い病気を抱える子どもの学び支援

被災した子どもの学びや育ちの支援

支援領域

困難な状況でもよりよい学びができることを目的に、教科学習だけでなく、体験学習や遊び、文化的な活動まで含めた活動を支援しています。また、学び以前の課題までを広く支援対象としています。

経済的困難を抱える子どもの学び支援

経済的な困難により学びに課題を抱える子どもたちの意欲を高め、学びに取り組む手助けとなる事業

- 学習支援
- 外国ルーツの子ども
- 学びの意欲向上
- 訪問支援
- 子どもの居場所
- 支援基盤整備 など

重い病気を抱える子どもの学び支援

重い病気により長期入院や長期療養をしている子どもの意欲を高め、学びに取り組む手助けとなる事業

- 学習支援
- スポーツ・文化体験
- 病気への理解支援
- 食育
- 調査・啓発
- 学びの意欲向上 など

被災した子どもの学びや育ちの支援

被災した子どもの学びや育ちに寄与する活動。災害によって、生活上の困難を抱える子どもや被災によるストレス、学習困難などを抱える子どもに対する支援

- 学習支援
- ストレスケア
- 学びや育ちの環境づくり
- 居場所支援、育児支援 など

被災した子どもの学びや育ちの支援

石川県能登半島で震度７が観測された地震では、揺れそのものに加え、津波や火災の被害が大きく、子どもたちの学びや育ちへの影響も大きいと考えられます。子どもたちが直面している困難の解消に貢献していけるよう、20団体に緊急助成を行いました。その中から4団体をご紹介します。

- **発災：2024年1月1日**
  最大震度7（ﾏｸﾞﾆﾁｭｰﾄﾞ 7.6）
- **避難者数：最大51,605名（1/2時点）**

出典：国土交通省 令和6年能登半島地震における被害と対応（令和6年5月）

のと復耕ラボ

能登半島地震で被災した子どもの居場所づくりとケア

のと復耕ラボがある石川県輪島市三井町は、仮設の学校から遠く、保護者たちは送迎に苦労していました。困りの声を聞いたのと復耕ラボは、放課後と長期休みの見守りを開始。放課後、スクールバスで三井町まで帰ってきた子どもたちをそのまま居場所で預かり、遊びの時間を提供することで子どもの心のケアも始めることに。保護者からは、「市街地の居場所までは送迎できないのでありがたい」との声があがっています。のと復耕ラボは、ボランティアの募集や宿泊所の提供、一次産業の復興策会議なども行っています。

救援物資の拠点であった保育所の中にある居場所

遊びのプロのボランティアが入ることで、子どもたちが笑顔で過ごす時間を作っている

3団体で連携して支援

福岡 特定非営利活動法人いるか

石川 特定非営利活動法人シンママ応援団

石川 NPO制服バンク石川

金沢市内へ避難している能登地域の子どもたちの学習支援

1.5次避難、2次避難で金沢に来た子どもたちの学習支援を、金沢と福岡でタッグを組んで実施。シンママ応援団・制服バンク石川は子どもたちの対応と場の運営を、いるかは学習コンテンツと講師を準備しました。熊本地震での経験を生かしたオンライン支援を行ういるかの講師は、福岡からオンラインで１対１で学習指導。金沢側では、学習スペース、タブレットなどの機器を準備し、子どもたちをサポートしながら学習支援の場を運営しています。学習スペースは地元の銭湯などにあり、お弁当も提供されています。制服バンク石川は、二次避難で新しい学校に通う子どもたちの制服の支援、シンママ応援団は二次避難のシングルマザーの子どもたちの支援なども行っています。

福岡：大学生がオンラインで指導 → 金沢：学習スペースで子どもたちが学習

「わかりやすかった」「もっとやりたい」という声があがっている

石川県は小学生から制服があり（85％の学校）支援が必要

経済的困難を抱える子どもの学び支援

子どもの貧困 約9人に1人※1
高等学校の中途退学者 約4万人※2
社会的養護児童 約4万2千人※3
外国ルーツの子ども 約14万人※4

経済的困難の中にある子どもたちは学びや生活に困りごとを抱えがち。コロナ禍による打撃で将来の選択肢を失い社会的に孤立する家庭も。最近は自治体での学習支援も増えてきましたが、孤立しないための包括的な支援体制や、支援を持続可能にする地域の関係機関との協働も必要だとわかってきました。最大３か年の中長期的な計画で、地域と協働し包括的な活動に取り組む団体を支援しています。

※1　出典：2022年国民生活基礎調査（厚生労働省）
※2　出典：令和４年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）
※3　出典：令和６年４月 社会的養育の推進に向けて（こども家庭庁）
※4　出典：令和４年度 外国人の子供の就学状況等調査（文部科学省）

Pick Up

地域の多世代が交流する居場所をハブとした学習支援

現状と課題

家庭や単独の団体だけでは
カバーできない

課題1　ニーズが多様で支援しきれない

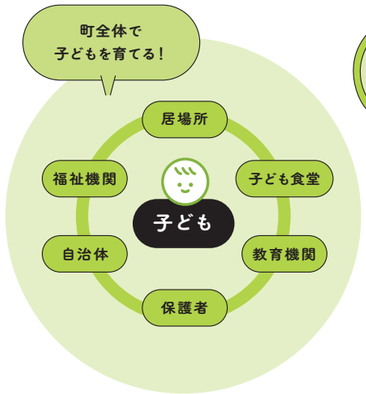
困難を抱える家庭は、子どもの学びに関する相談の場や適切な支援先にアクセスしづらいことも。無料の学習支援があっても、各家庭のニーズは多岐にわたるため、個別の対応が必要となりますが、そこまでできていないのが現状です。

課題2　学習支援だけでは解決できない

困難を抱える子どもが学習に向かうためには、まず学習支援以前に生活環境から見直す必要がある場合もあります。偏った食事や孤食を改善したり、将来の夢をもつためのワークなどを通じて気力や集中力を回復させたりすることが急務となっています。

課題3　地域の担い手や連携の不足

対象となる子どもを支援するには、子どもとの信頼関係が不可欠ですが、子どもを理解し、伴走できる人材は不足しているのが実状です。学校や行政などを含め、支援者や関係機関が協働していくことが必要です。



取り組み

町全体で大家族のように
多世代で子育てに関わる

学習支援だけでは解決が難しいため、まずは対象の家庭や子どもの個別の困りごとやニーズを把握。調査をもとに試行錯誤し、食事支援や自然体験活動などで接点を増やすことに。子どもたちとの接点が増えると、適切な支援ができる担い手も必要となります。信頼関係を築き、生活環境を改善しながら気力や集中力を回復させていくには、多様な関わりも必要。地域の関係機関と連携し、多世代・多職種の人が継続的に関われる仕組みを作り、町全体で子どもを育てる取り組みをしています。

一般社団法人ユガラボ

多世代が安心して集える居場所や、
継続的な学びを支える地域の
プラットフォームに

子どもたちの声から始まった多世代が集う居場所。ゆったりと遊んだり学びをサポートしたりするかたわら、食材支援やソーシャルワーカーなどにつなぐ地域のセーフティネットとしても機能。さまざまな支援につなぐハブ拠点となっています。他団体とも交流し、ノウハウを共有するなど協働して地域を支えています。

食料支援をしながら個々のニーズを把握し、活動に活かす

対象世帯に食品を配布する際、どんな支援ニーズがあるかをヒアリング。子どもの教育に関して寄せられた悩みをまとめ、学習支援について情報発信。「悩んでいるのはわが家だけではない」「悩みに合った解決の場がある」と周知できました。利用者の多いSNSも積極的に活用しています。

学習コーディネーターが個別のプランを作成し、きめ細かく学習支援

勉強したい小中学生に、個別の学習プランを作成しマンツーマンでレッスン。日々の学習や高校受験に伴走しました。初めは勉強に抵抗感があった子も、コーディネーターとの信頼関係を積み重ね、徐々に意欲をもてるように。「挑戦したいと思えるようになってきた」という声が聞かれました。受験を終えた高校生が今度は教える側に回るというつながりもできています。

活動団体の声

地域内外の支援者やほかの支援団体との交流や連携もできるようになり、子どもたちを支える基盤が整ってきています。今後は利用してくれる人数を増やしたり、積極的に情報を発信したりして、強固な地域ハブとしての役割を担っていきたいと思います。

認定特定非営利活動法人 フードバンク北九州ライフアゲイン

町の人たちがひとつの大家族の
ようになることをめざして、
誰も孤立させない環境づくりを

家庭や企業などで出た食品ロスを生活困窮世帯に配るフードバンク事業を行いながら、食料支援だけでなくその後の継続的な包括支援へとつなげる活動をしています。空腹だけでなく心の栄養を満たせるよう、子ども食堂や学習支援などを通じて寄り添うことや地域の人と子どもたちの交流などを重視。町をひとつの大家族のような温かい居場所ととらえて支援を実施しています。

無料で夕食を提供する子ども食堂。地域のつながりの拠点に

主に児童期の子どもや保護者を対象とした子ども食堂。子どもたちが来やすいよう、小学校区に開設。夕方から集まり宿題をしたり遊んだり。時間になるとみんなで夕食をいただきます。多世代が交流する場にもなっており、ひとつの大家族のように、安心できる場所になることを目指しています。

学習支援をしながら、子どもとの信頼関係を大切にして伴走する場に

思春期の子どもを対象に、学生がボランティア講師となり対面やオンラインで学習をサポート。子どもとの信頼関係を大切にし、授業外の時間には子どもの話をじっくり聞きます。子どもの自主性や個性、自己肯定感を大切にしており、個別に立てた計画をもとに自分のペースで学びを進めています。

活動団体の声

町の人々や商店街の人々が、地域の子どもたちと交流し、子どもたちに町を愛する気持ちが育まれたらいいなと思っています。そのビジョンは、「ただいまが言えるまち、おかえり商店街」というキャッチコピーにも表れています。

重い病気を抱える子どもの学び支援

難病の子ども 約12.4万人*1

医療的ケア児 約2万人*2

医療の進歩で助かる命が増えた一方、長期的な治療や医療的ケアが必要な子どもの学びや体験の機会は十分ではありません。療養生活への不安、学習の遅れや体験の不足からくる意欲の減退といった問題を多くの人に知ってもらい、学び・体験の機会を提供する支援策をユニークな視点で考えることが必要です。同じ課題をもつ人のモデルとなる活動を、全国に普及させていくことが重要です。

※1　出典：「小児慢性特定疾病児童とその家族の支援ニーズの把握のための実態把握調査の手引き書令和4年3月」(厚生労働省)
※2　出典：「医療的ケア児とその家族に対する支援 に関する調査」令和6年3月（総務省行政評価局報告書）

Pick Up

事例·ノウハウを共有し、解決を後押し

現状と課題

情報がなく、解決の糸口が見つけられない

病弱児や医療的ケア児は、数も少なく、一人一人の症状や状態も異なります。困難な状況に遭遇しても、どれもレアケースで八方塞がりになることも。情報がなくあきらめることも多々あります。

取り組み

ノウハウと事例をみんなのものに

知っていたら「検討できた」「選択できた」「学校や行政を説得できた」「もっと良い状況にできた」。そんな機会喪失をなくすために、散在する情報をまとめ、使いやすくすることで、子ども一人一人の学びの環境づくりをサポートします。

特定非営利活動法人　未来ISSEY

長期入院・療養を経験する高校生を、在籍校での学びにつなぐ事例集を作成

小児がんや難病により、長期入院や療養が必要となった高校生は、それまで通っていた高校を休学・留年・退学になることがあります。全国の制度や、治療を続けながら学び続けた事例を集め、「友達や先生と共に学び続けられる」ためのガイドブックをつくりました。

くわしくはこちらから!

一般社団法人　在宅療養ネットワーク

医療を必要とする子どもたちが、学びの環境を自分で選ぶためのコーディネートガイドの作成

医療的ケア児が、通学など自分の希望に沿った学習環境を選択することはまだ浸透していません。そこで就学支援に関わる人が医療的ケア児の就学を適切にサポートできるノウハウを掲載。子どもの希望に沿った学びの環境を選ぶことを広めます。

「やり続ける」「関わる」ことが、変化をつくる

香川県で、病弱児・医療的ケア児の支援を続けている2団体。活動年数を重ね、対象の子どもたちだけでなくそこに関わる人たちや地域、県の変化をも生み出しています。

一般社団法人
在宅療養ネットワーク　代表理事
英 早苗さん

医療的ケアに対応した地域連携ハブ拠点を運営。医療的ケア児を取り巻く福祉・教育・医療等各所をつなぎ、子どもの育ちをトータルにサポート。

特定非営利活動法人
未来ISSEY　代表
吉田ゆかりさん

小児がん等慢性疾患の子どもの学びや体験の支援、家族の相談事業に注力。病気の子どもとその家族が、学校や社会から孤立せず希望をもって生活できることをめざす。

――助成を受け始めたときの事業を教えてください。

吉田さん　療養中の子どもがアバターで授業に参加するという試みや、病院で子どもと交流する学生ボランティアの育成などです。

英さん　医療的ケア児の進路や環境を多様な選択肢から選ぶためのヒントブックの製作です。人材の育成、地域の体制や環境づくりにも力を入れてきました。

――行政や地域の課題意識や取り組みはどのような状況でしたか？

吉田さん　そもそも小児慢性疾患について問題意識は持たれていませんでした。治療以外にも教育や進路、家族の離職の問題など課題があることは知られていませんでした。

英さん　児童発達支援や放課後デイでも医療的ケア児は対象外で、家族がみるのが当たり前、外で保護者と子どもが離れて過ごす居場所は病院以外に選択肢がありませんでした。

――この数年で意識や状況に変化はありましたか？

吉田さん　病院で子どもと交流する「グッドブラザー」の趣旨に賛同した学生達の存在が、病院やほかの保護者に伝わり、少しずつ変化してきました。

英さん　医療的ケア児支援センターができ、地域づくりが進んできました。各地域に核となる人材が育ち、支援の場を増やす動きが広まってきています。

――学校での認知や受け入れ体制は変わりましたか？

吉田さん　理解者の先生などから、少しずつ認知が広がっていると感じます。

英さん　医療的ケア児の就学について関心は年々高まり、受け入れを前提とした話ができるようになってきました。法律や予算ができたことの影響もありますね。

吉田さん　法律や予算の面では、小児慢性疾患はこれからなので、課題意識を高めていきたいです。

英さん　病気の子どもという点は共通しているので、いろいろなところでテーマとして話すようにしています。いっしょに認知を高めていきたいですよね。

――支援団体さん同士、横のつながりはありますか？

吉田さん　うちのグッドブラザーが医療的ケア児を訪問し、交流しました。年齢が近いので寄り添うことができ、視野も広がったようです。

英さん　来てくれてとても助かったし、若い人が経験してくれたことがうれしいです。先入観をもたずに柔軟に接してくれました。

――数年前と比べ少しずつ認知が高まっていますね。

英さん　学校に看護師さんが入ったり、コーディネーターがついたりと、教育・医療・福祉などの情報を総合して子どもの最善を考えられるようになってきました。

吉田さん　長期療養の高校生の学び事例集をつくったことで、県内の教育委員会での認知が高まりました。がん教育の講演の依頼も入るようになりました。

英さん　冊子はうちも反響が大きく、読んでくれた看護師さんや保健師さんたちが、いっしょにやろうという気持ちになってくれました。

――これからどんなことをめざしていきたいですか？

吉田さん　多くの人に小児慢性疾患のことや悩みを知ってもらいたいです。

英さん　子どもたちを応援してくれる人を増やしたいです。子どもの将来を子ども自身が描けることを大事にしたいです。

研修やつながり･交流の機会提供

子どもたちの支援を続けるには、支援する側も持続可能であることが求められます。子どもたちが学びにアクセスし続けられるために、組織基盤の強化が図れ、団体同士のつながりが強められる非資金的な支援に取り組んでいます。

Pick Up

団体別の課題解決をめざした研修の実施

資金調達、ステークホルダーとの関係づくり、事業評価など、活動団体のニーズに合わせた研修を実施。2023年度は知識･スキルの底上げをする全体研修と共に、団体別に個別セッションを複数回設け、個別の課題について講師と深く議論しました。

資金集めではなく仲間集めの手法を学ぶ
ファンドレイジング研修

特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会から3人の講師をお招きし、全体研修3回、個別セッション2回を実施。全体研修には14団体、個別セッションには3団体の参加がありました。

研修の目的：自団体のファンドレイジングアクションを考えられるよう、ファンドレイジングの基本を学ぶ
全体研修：ビジョンのストーリー化・自団体の既存・支援者分析、支援者への提供価値分析
個別セッション：自団体のアクションプランを考える

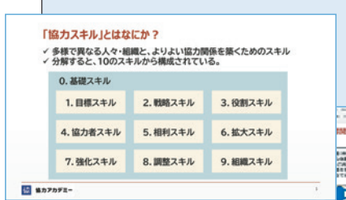
参加者の声

●個人としてでなくチームとしてファンドレイジングに取り組むため参加。複数のメンバーを巻き込むことができ、期待以上のものが得られました。●ワークが多く、一般論だけでなく自団体のファンドレイジングについて個別化して考える機会になりました。

協力関係を引き出す手法を学ぶ
協力のテクノロジー研修

特定非営利活動法人協力アカデミーの松原明さんを講師にお招きし、全体研修1回、個別セッション2回を実施。全体研修には13団体、個別セッションには3団体の参加がありました。

研修の目的：関係者の協力を引き出す「相利」の考え方について学ぶ
全体研修：「相利」を具体的にしていく６つのステップについて学ぶ／「相利評価表」を作ってみる（ミニワーク）
個別セッション：全体研修をもとに自団体の６つのフレームワークをセッションしながらつくる



参加者の声

●団体の活動が多岐にわたってきたので、今一度目標を明確にしたくて参加しました。セッションを通じて自分たちの団体の軸となるものが確認できました。●セッションを通じて、法人が抱える課題が明確になりました。

Pick Up

こども家庭庁×助成団体の情報交換

助成団体間の交流や、相互の知見・ノウハウの共有等のサポートのひとつとして交流会を実施しています。重い病気を抱える子どもへの学び支援を実施している団体どうしの交流会として、2023年度はこども家庭庁を訪問。当事者の声や現状の課題を伝え、情報交換をしました。

小児がん当事者の声

治療の副作用で院内学級にも通えなかったり、学校に戻ってもカリキュラムが進んでいたりと、勉強をしたくてもできない辛さや困りごとを当事者の声で届けました。

学びの環境を整えてほしい、と高校生自ら発信しました

支援現場で感じること

病気の子どもたちの学びの課題は、医療・福祉・教育の分野にまたがります。どこと話をしたら課題解決に向けた議論が進むのか、突破口がなかなか見えてこない、という声が多く挙がりました。

今後に向けて

難病や医療的ケアが必要な子どもたちは、状況の多様さと数の少なさから、個別の課題として放置されがち。関係者が力を出し合い課題に取り組む動きになるよう、これからも声を届けつながりを強くしていきたいと決意を新たにしました。

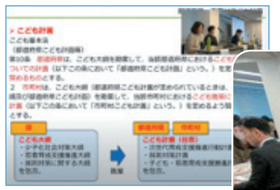
情報交換をしながら、“こどもをまんなか”にして力を合わせていこう、と話し合いました

Pick Up

情報交換＆交流

年に一度、時間をかけてインプットや情報交換をする会と、毎月気軽に話せるオンラインの会を開催。同じ想いの人をつなぐ・話す・インプットする機会を用意しています。

● 1泊2日でノウハウ交流やインプットを行う「交流会」



児童福祉法改正やこども計画など行政の動きをインプット。活動団体として、何を見ていかなくてはいけないかを議論しました。

熱心に聞き入る参加団体の皆さん

● 気軽な学びと相談「ゆるトーク！」

ほぼ毎月実施している「ゆるトーク！」。ゆるく相談や情報交換をしています。時々ゲストを呼んでインプットもしています。